

Title	鈴鹿山脈森林植生の植物生態学的研究( Abstract_要旨 )
Author(s)	南川, 幸
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1965-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/211500">http://hdl.handle.net/2433/211500</a>
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	南 川 幸
	みなみ かわ みゆき
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 74 号
学位授与の日付	昭 和 40 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	鈴鹿山脈森林植生の植物生態学的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 四手井綱英 教 授 今村駿一郎 教 授 岡崎 文 彬

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は本州中央部の最狭陸地部に位置する鈴鹿山脈全般にわたり、森林植生を植物群落学のおよび植物分布地理学的に詳細な調査を行なった結果をとりまとめたもので、極相群落と二次群落の組成を明らかにし、その地理的分布を確立するとともに、植物目録を作成して同山脈の分類地理学上の位置を解明し、さらにそれらを総合して植物生態学的な考察を加えている。その大要はつぎのとおりである。

(1) 極相群落には次のものがある。

1. ブナースズタケ群集

(i) アセビ亜群集, (ii) ホンシヤクナゲ亜群集

2. ツブラジイーサカキ群集

(i) アラカシ亜群集, (ii) ミミズバイ亜群集

3. ウラジログシーサカキ群集

(i) アセビ亜群集, (ii) ツガ亜群集, (iii) アスナロ亜群集

温帯に属するブナースズタケ群集は海拔 800m 以上の山地に成立し、暖帯に属するツブラジイーサカキ群集は海拔 300m 付近まで分布し、その上部にウラジログシーサカキ群集が海拔 800m 付近で直接ブナースズタケ群集に接していて、両群集間に暖帯性の落葉樹林は認められない。これらの群集の組成は西南太平洋型森林の特徴をそなえている。

(2) 二次群落には次のものがある。

1. コナラーケネザサ群集

(i) ミヤコザサ亜群集, (ii) ススキ亜群集

2. アカマツーヤマツツジ群集

(i) コバノミツバツツジ亜群集, (ii) コナラ亜群集, (iii) ススキ亜群集, (iv) ミヤマザサ亜群集,

(v) アラカシ亜群集, (vi) コシダ亜群集

### 3. ブナースズタケ群集

#### (i) ベニドウダン亜群集

### 4. ミヤコザサ群集

#### (i) イブキザサ亜群集

### 5. フサザクラリーヨウメンシダ群集

ユナラーケネザサ群集、アカマツーヤマツツジ群集は暖帯に属する極相群落が人為的にくりかえし破壊された跡に生じるものである。温帯に属する極相群落は破壊されると、花崗岩地帯山頂部ではツツジ科の低木を混じた群落にかわり、北部山地では大面積のササ群落を生じている。フサザクラリーヨウメンシダ群集は両帯にわたり湿性の谷間の二次群落として分布している。

(3) 植物分布地理学的に本山脈産の 428 種の木本植物を調査すると、四国・九州と最も密な関係が認められ、朝鮮と 42.5%、支那本部と 32.7%、琉球と 19.6%、台湾と 14.5% の共通種をもち、暖地性植物、大陸要素の植物が多いが、北海道とも 42.5% の共通種が認められる。

特に注目すべきことは、海拔 800m 以上の地域には裏日本系の植物が南下進出し、あるいは遺存して分布していることである。

すなわちヒメモチ、ハイイヌガヤ、チャボガヤ、ヒメアオキ、タイミンガサ、オオカニコウモリ、サワアザミ、ホクリクネコノメソウなどがそれである。

その他コモノギクをはじめ本山脈を基準産地とする植物も相当多く認められる。

(4) この調査結果からみれば、本山脈の植生は一般に西南太平洋地域の森林の特徴を示すが、上記の裏日本系の植物が、特に低木層以下に分布しているところからみれば、冬季の季節風のもたらす積雪と密接な関係のあることが明らかである。

既往の積雪調査資料、現地観測、実地踏査および航空写真を総合すると、これら裏日本系植物の南下限界は平均最深積雪 50cm 線とよく一致することが認められ、本山脈の北西部が冬季の季節風によりかなりの影響をうけていることが明らかになった。

## 論文審査の結果の要旨

鈴鹿山脈の植生に関する調査報告は古くより多数公表されているが、地域的に局部的なものが多く、その全般にわたり詳細な調査を行ない植物生態学的な考察を加えたものはない。

同山脈は古来林業的取扱が盛んで、特に製炭の発祥地として知られ、奥地までよく開発されて針葉樹造林地あるいは低林化された二次林が多く、気候的極相を呈する天然林はきわめてすくない。

この地域は本州中央部の最狭陸地部に位置するため、気候的にもはなはだ複雑であり、従って植生上もすこぶる興味のある地域である。

本論文は著者が長年にわたり、くまなく実地調査した結果の集大成であって、植物生態学上きわめて有意義なものである。

特に極相および二次群落の類別を確立し、その垂直分布を明らかにして、本山脈の森林植生の位置づけを行なったこと、さらに山地上部に分布するブナースズタケ群集内に多数の裏日本系の好雪性植物が低木

層以下に広く分布することを見出し、この分布と気候とを結んで考察し、その分布限界が積雪深と密接な関係にあることを明らかにしたことはすぐれた成果である。

これらの成果は、いずれも植物生態学に新知見を加えたものであって、今後の本山脈の林業の基礎となり、また森林の風致的開発にも十分な資料を与え、学界ならびに応用面に貢献するところが大きい。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。